Interview＃06

*2025年3月インタビュー

2025年3月所属：医学系研究科 総合保健学専攻
(東海国立大学機構次世代リサーチャー／日本学術振興会特別研究員)
2025年4月所属：岐阜大学医学部看護学科（助教）

医学系研究科　田村 晴香 さん

これまでやってきた研究の概要を教えてください

主に、産後の女性を対象に、産後うつと生活習慣、特にメディアの影響について調査しました。約2年間、母子の健康状態を追跡する研究を行い、産後うつが長引く人の特性を検討しました。

この春からはどういう仕事をする予定ですか？博士までの経緯は？

岐阜大学医学部看護学科で、地域看護学の助教として勤務予定です。私は博士課程に進学する前に、公務員として保健師の仕事をしていました。地域住民の健康支援を通して課題意識が芽生え、もう少し深めたいと考えて、社会人をやめて修士課程で在籍していた研究室に戻ってきた、という経緯があります。

就活の流れや、キャリアに関する考え方は？

それほど積極的な就職活動はしなかったのですが、進路については長期間悩んでいました。異なる分野の研究に興味を持ったり、研究をメインとする非常勤研究職やポスドクとして働くことを考えたりしていました。看護学の教員職は教育への比重が高くて研究がしにくいことを懸念したのですが、先輩方の体験談を参考にした結果、私は研究と教育を両立してやっていきたいという思いが固まりました。ちょうどそのタイミングで希望に合う公募が出て、応募した1件で内定をいただくことができました。そのため、実質的に就職活動は1件のみで終了しました。

キャリア形成にあたって活用したこと、在学中に経験してよかったことを教えてください。

「次世代研究者育成プログラム」と「学振特別研究員」への挑戦と積極的な参加です。まず、自分の研究内容の価値、社会的な意義を分かりやすく伝え、研究費をもらい、完了まで進めていく、という過程自体が社会人時代には経験できない貴重な体験でした。また、異なる研究分野の人々と関わることで、励まし合う仲間ができただけでなく、専門分野を超えてコミュニケーションをとるスキルも鍛えられました。また、名大の博士課程教育推進機構キャリア教育室の存在も支えになりました。特に「博士学生は社会的に価値があり、一人の研究者として給与を貰いながら学ぶのがグローバルスタンダードなのだ」という講義が私の中では衝撃的で、漠然と抱えていた罪悪感や劣等感が軽減されるきっかけになりました。

就職活動で評価されたであろうと思うことはありますか？

研究と教育の両方で得られた実績は即戦力として評価してもらえたと感じています。また、公務員の保健師として現場経験があったことも評価されたと思っており、実際、多様な年齢層の健康支援に携わってきた経験は、教育や研究活動にも活かせる基盤となっています。

後輩たちにエールをお願いします。

せっかくなので私だからこそ伝えられることをお話しします。私は博士課程の間に2回出産し、3人の子どもを育てながら研究を続けてきました。子育てと研究の両立は自分の力だけではコントロールできないこともたくさんあったのですが、勇気を出して「支えてほしい」と声を上げると、周りの人は想像以上にサポートしてくれました。ある学会では、泣いている子どもを抱っこ紐であやしながら学会での賞状を受け取ったこともありましたが、事務局も参加者も、温かく見守ってくれました。一方で、産休に相当する制度においては、「前例がない」という理由で私の希望が通らず、苦しい思いもしました。ただ、近年は制度面でもだいぶ小回りが利くよう、柔軟になってきています。温かい家族の存在は研究活動を頑張る原動力になりますし、私にとって博士課程は本当に楽しかったです。育児と研究の両立は可能なので、諦めないで欲しいです。あともう一つ、一度学部や修士で就職した人が、職を辞して一般の博士学生として研究に専念するケースが増えることに期待しています。特に看護学では社会人学生（職を持ちながら大学院生をする）が多いですが、研究活動に思い切り集中して、時間と場所をコントロールできる期間はすごく重要かつ貴重に感じました。研究に専念できる博士学生が増えることは、看護学全体の発展にもつながるかもしれません。社会人として現場経験を積んでからアカデミアで研究に集中したいという人も、ぜひ博士課程に挑戦してみてください。